

第5回日本放射線看護学会学術集会について

Overview of the 5th Annual Meeting of the Radiological Nursing Society of Japan

太田 勝正

Katsumasa OTA

名古屋大学大学院医学系研究科

Nagoya University Graduate School of Medicine

平成28年9月3日(土)と4日(日)に、「放射線と向き合う看護」をテーマに掲げた第5回日本放射線看護学会学術集会が、東京医療保健大学国立病院機構キャンパスで開催された。2日間の実参加者数は438名であった。

学術集会長草間氏は、学術集会HPの挨拶の中で、放射線看護が放射線治療やIVR(インターベンショナルラジオロジー)や原子力事故における被ばく医療に関わる一部の看護師に関するものと捉えられ、多くの看護職が自分たちの問題ではないと認識している可能性を指摘するとともに、放射線看護に関する基本的な知識・技術が、医療安全(Patient Safety)の一環としてすべての看護職に必要なことを示している。また、学会理事長としての挨拶(学会HP)の中では、学際的、実践的な学問である放射線看護学の確立のためには、放射線医学、放射線防護学、放射線計測学、リスク学など、既存の学問とのコラボレーションが極めて重要であることを述べている。第5回学術集会は、まさにそれらの課題に向き合うものであり、そのために必要な知識や最新の情報を提供するとともに、放射線看護学会のあり方についての共通理解を目指す意欲的な学術集会であったといえる。

主なプログラムを以下に示す。この中で、会長講演、原子力規制委員の伴信彦氏の特別講演、日本放射線技術学会と日本保健物理学会との共催によるシンポジウム、および、放射線のリスクや放射線看護の専門家と放射線治療に関するテーマを取り上げた教育講演については、それぞれの演者がまとめた概要報告を参照されたい。ここでは、看護学生や臨床看護師向けの放射線の基礎や放射線防護などの教育・研修プログラムを体験できる四つのワークショップについて概要を紹介する。

学会会場となった東京医療保健大学(国立病院機構キャンパス)は、博士前期課程の看護科学コースの中で、放射線や放射線影響の基礎や放射線防護体系などに関する科目を提供している。言うまでもなく、学術集會会長は看護のみならず放射線防護に関する権威でもある。長年の教育実践の中で積み上げ磨かれた教育プログラムの中から、(1)目に見えない放射線を霧箱の中の軌跡として見えるようにする実験、(2)「被ばくする時間を短くすること」「線源から離れること」「線源と被ばくする人との間に遮蔽物を置くこと」という外部被ばく防護の3原則についての簡単な測定器と線源を用いた実験、そして、(3)病棟でのポータブルX線撮影装置による撮影時の周囲への散乱線を実測することで、ケアが必要な患者を見守りながら病室内に留まっても、患者から2m以上離れていれば看護師の被ばくは無視できるほど少ないことなどを確認する三つの実験をメイン会場から少し離れた建物ではあったが提供した。これと併せて、国立研究開発法人日本原子力開発機構の協力を得て、移動式ホールボディカウンター車による体内の自然放射性物質(カリウム40)を実測する機会も提

供した。実験装置などの都合で参加できる人数は限られたが、どのワークショップもほぼ予定定員を満たす参加者を得ることができた。このようなワークショップは、場所、装置・機材、そして実務（実験など）をこなせる専門家の三つの条件が揃わなければ実現できない。揃っていても、準備や学会当日の運営を考えれば困難は大きい。あえてこのようなワークショップを企画し、成功裏に成し遂げた関係者の熱意と努力に敬服するとともに、放射線がわかる看護職、放射線被ばくとそのリスクに向き合い、放射線防護に取り組める看護職を育てることの重要性をこのプログラムが示していたのではと考える。

〈主なプログラム〉

- ・ 会長講演「放射線看護学の確立をめざして」
- ・ 特別講演「放射線防護と看護の接点」
- ・ シンポジウム「放射線看護学の確立に向けた学際的なコラボレーションのすすめ方」
- ・ 教育講演
 - 1) 発がんリスクと予防対策
 - 2) 放射線治療入門～知っておきたい基礎知識と最前線～
- ・ ランチョンセミナー
 - 1) 医療者としての放射線被ばくの知識
 - 2) 造影剤のリスクマネジメント情報
 - 3) 私たちが知って、実施し、考える放射線防護とは！—放射線と生きる—
 - 4) 看護職の個人被ばく線量の管理
- ・ ワークショップ
 - 1) 自然放射線の測定／霧箱
 - 2) 外部被ばくの放射線防護
 - 3) ポータブル（移動型）エックス線撮影装置を用いた実験
 - 4) ホールボディカウンターによる測定体験
- ・ 特別企画「放射線看護分野の専門看護師に求められるもの」
- ・ 交流集会
 - 1) 放射線看護分野における看護職の活動と将来展望
 - 2) 放射線看護！今後どうあるべきか～様々な立場から語り合う～
- ・ 口述発表 7群 28題（1題は発表取り下げ）
- ・ 示説発表 7群 27題
- ・ 交流会 1件

最後に、企画委員会が行った参加者アンケートの一部を紹介したい。約30%の参加者から回答をいただいた。

プログラム全体については、大部分の参加者が肯定的な評価をしており、個々のプログラムについても同様に否定的な評価はほとんど見られなかった。前述のワークショップについても否定的な評価はほとんど見られず、参加者がそれぞれの課題について体感できた可能性が示された。一方、アンケートの自由記述欄には、今回のプログラムが個々の参加者のニーズに必ずしも答え切れていない点や今後の改善を求める意見なども示されていた。これらは、次回の第6回学術集会（名古屋大会：H29年9月2,3日）の企画に活かしていきたいと

考えるが、全体としては当学術集会の意図が参加者にある程度は伝わっていたと考える。

学術集会会長を含む9名の企画委員と多くの実行委員、学生、そして協賛企業の援助の下で、438名の参加者を得て開催されたこの学術集会が、第一線の専門家による講演やシンポジウム、そして54題の研究発表などとともに無事に終了した。看護における放射線診療や放射線防護の位置づけと専門性をより明確にし、発展させるとともに、放射線と向き合える看護職を育てる基盤を提供していくうえで、当学会の大きな節目となったと考える。